

ようこそ糖尿病劇場へ！ 患者さんとのより良い治療同盟を目指して

医療法人社団幸隆会 多摩丘陵病院 栄養科 原 純也

皆さん、「糖尿病劇場」（以下、劇場）をご存知でしょうか？
劇場は2009年3月のNPO法人西東京臨床糖尿病研究会に始まり、5月の日本糖尿病学会学術集会で2日間行われたことで知られるようになりました。今では北は北海道、南は沖縄まで全国的に展開されています。

私達は多くのメガスタディから「科学の知」を得て、最適と思う治療にむけて患者の療養指導を行ってきました。ところが「科学の知」に基づく療養指導が上手くいかない患者さんは沢山います。私達はその理由を医療者と患者の間に「思いのずれ」があるためではないかと思っています。そこで劇場では日常の指導現場から、ありふれたワンシーンを再現し、患者さんと医療者の「思いのずれ」を見せています。その後にワークショップを行い、なぜずれが生じたのか、そのずれを埋めるにはどのようにすれば良いかを一緒に考えます。劇場はワークショップ、観客の意見を醸造する場で、意見が上手に醸造できれば完成です。正解はなく極めてケースバイケースで、大事なことはその根底にある「エンパワーメント」への「道しるべ」を示せれば……と思っています。症例検討は医学的な検討をするのに対して、私達の劇場は患者・医療者間の関係や双方のナラティブな部分に注目をしています。

また、劇場を作成する過程もワークショップそのもので、スタッフは次のようなステップを経ることで確実に成長します。

1. 劇場を観て、ワークに参加すること（できれば沢山の意見を言って目立つこと）
2. 役者の演じる快感を覚えてやみつきになること（最初は裏方として参加して、徐々に演じる側に回ると心の準備ができます）
3. シナリオを作成し、ワークする（隠れた情報＝暗黙情報を引き出す）部分を考えること
4. ワークのファシリテーターを経験して会場からの意見を醸造すること

1度だけの体験では満足感だけになりがちですが、段階を踏まえて経験を積むと、考えも深まり自分自身も成長し、ワーク全体の流れを作れるようになってきます。私はこの約3年、劇場での体験を通してたくさんのことを学びました。患者や他の医療者を演じて台本にはないその人の思いや背景を考えることで、患者さんの立場に思いを寄せるようになりました。「こんなことを言われたら、この人だったらどう思うだろう？ 素直に返事をするのかな？」とか、「この患者さんは今どう思っているのだろう。この人にはどんな関わり方が良いのだろう」など考えることによって、療養に直結したスキルが向上したと思います。また、それまでは患者さんから受けた相談には自分が答えを出さねばと探していましたが、今では患者さん自身で答えを探せるような援助ができるようになりました。つまり「こうなってもらいたい」「こうなったら糖尿病が良くなる」という療養指導士中心の思いよりも、患者中心のエンパワーメント的な考え方「患者さん自身が答えを持っている」という姿勢が強くなったと感じています。

最近、「地域の研究会で劇場をやってほしい」という声が多く寄せられるようになりました。もっと身近に糖尿病劇場を感じたい、患者さん自身の思いをもっと知りたい、ということの表れかと思います。劇場には2つのパターンがあり、1つはお任せ型で、ファシリテーターと俳優陣、シナリオ全てを私たちが出張して行うパターン。もう1つは現地調達型で、糖尿病劇場を観て興味を持ち、私たちと一緒に演じた方が自分たちの研修会で台本から演技まで行うケースです（ファシリテートのみ依頼されることもしばしばです）。最初はお任せ型ばかりでしたが、参加者が増えるに従って「演じてみたい」方々も増えて、団員も色々な地域で活躍するようになりました。最近では市民公開講座で患者さんやその家族や地域住民の方々を対象とした依頼も来ています。観たことがない方はまずは観に来てください。そして何回か観た方は是非、糖尿病劇場と一緒にやってみませんか？ ようこそ、糖尿病劇場へ！ 皆さんの参加を心よりお待ちしております（参加したいなど、お問い合わせはeiyo@tamakyuryo.or.jp へお願いします）。



第54回日本糖尿病学会学術集会 特別シンポジウム「糖尿病って治りますか？」